令和３年度学校教育目標
（２０２１年度）

伊丹市立西中学校

教育目標　　あらゆることに活力にあふれた生徒の育成

～　自ら学び、自ら行動する生徒の育成　～

１　めざす学校像

（１）自ら学習に励む生徒を育てる学校

（２）授業や行事、部活動などで自尊感情を育む学校

（３）安心して生活できる学校

（４）家庭、地域社会と連携する学校

（５）生徒一人ひとりの居場所となる楽しい学校

２　めざす生徒像

（１）進んで学習に励む生徒

（２）授業や行事、部活動に活力を持って主体的に取り組む生徒

（３）将来の夢や目標を抱き、その実現に向けて挑戦する生徒

（４）自尊感情と他者への思いやりの心を持つ生徒

（５）規範意識や基本的生活習慣が身に付いた生徒

３　めざす教師像

（１）教育に対する信念と情熱を持った教師

（２）生徒個々の良さを認め、生徒の心にふれる指導ができる教師

（３）授業改善を含め、自らの資質向上のため努力を重ねる教師

（４）生徒と一緒に楽しみ、活力を持ってあらゆる活動に取り組む教師

（５）地域の一員として常識ある社会人である教師

本年度の努力目標　『継続と徹底』

（1）授業改善に取り組み、様々な学力向上策を実施する。

①学習規律５箇条の徹底（私語、姿勢、忘れ物、大きな声で授業の始めと終わりのあいさつ、チャイム席）

②ユニバーサルデザインの視点に立った学習環境の確保（教室前廊下の雑巾や清掃道具の整理整頓、教室後ろのロッカーの鞄の整理整頓、机の整列、教室のゴミ拾い、教室の掲示物の整理、黒板周りの掲示物の整理、カーテンによる前のロッカー等の目隠しの設置）

③授業スタイルの確立（魅力ある授業づくり）

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり

・本時に入る前の「めあて（本時の目標）」の共有化

ゴールを示すことにより、生徒の学習に対する安心感を生み、意欲的な取り組みにつながる。

・興味・関心を高める導入

新聞の活用、資料の提示、実物や映像を見せる、日常生活の中で見られる興味を引く話等。

・本時に自主的な生徒の活動を取り入れる時間の確保（十分に時間をとる）

・・・自力解決、自分の考えを持つ（適切な机間指導）。

文章を書く、グループワーク（個人→ペア→グループ→クラスで意見交流、説明、発表、評価）

ホワイトボード、タブレットなどのＩＣＴ機器の積極的な活用等

・まとめで「めあて」に対する振り返りを行う。

授業の最後にまとめとして、ノートに「めあて」が達成できたかどうかコメントを書かせる。

④授業づくりのポイント（ストレスのたまる苦痛の授業からの脱却）

・教師が説明する授業、教師からの一方的な授業、理屈で進む授業から脱却する。

・教師の笑顔に満ちた表情、演技力に富んだ動き、話すときの間、声のトーンや大きさを計算する。

・子どもが体を動かし、発言し、活動する、そして子どもらしい自由な発想が現れる授業を行う。

・本物に触れる授業を、理屈では無く実際にやってみる授業を行う。

・生徒が、真剣に聞く、粘り強く考えるという『静』の場面と、積極的に発言、発表、活動するという『動』の場面をつくる。教師が話す時間と生徒の活動の時間の比を半々にする。

・教科書も教材の一つとして活用しつつ、むしろ教科書には記載されていないような、生徒の心を揺さぶる優れた教材を使って、教科書が想定している水準を超えた深い認識に到達させることができるような「教科書で教える授業」を目指す。

⑤先進校視察の実施、研修会への参加

担当者等が随時、良い授業や先進的な取り組みを見るため、先進校を視察したり、本校の課題解決に向けた研修会に参加したりする。

⑥適切に「週末課題」をかす。

５教科を中心に金曜日に「週末課題」として宿題を出し、月曜日朝に教科リーダーが回収し、その日のうちに教科担任がチェックする。未提出者やできていない生徒は火曜日の「学習優先の日」に最後まで取り組ませる。なお、週末課題については「月予定表」を保護者に配布し、家庭でも「週末課題」の徹底を子どもに呼びかけてもらい、家庭学習の定着を図る。

⑦生徒が終礼で家庭での復習が必要であるか不必要であるかを授業ごとにチェックし、それをもとに家庭学習の計画を立て、実行することによって家庭学習の定着を図る。また、家庭学習の計画を立てやすいように「連絡帳」を活用する。

⑧思考力、表現力を評価するため、定期考査や実力テストに記述式の問題を１問は出題する。

⑨学習の目標、授業の進め方・ポイント、家庭学習のやり方、ノートの作り方、評価する内容、評価の元になるものなどをまとめた「シラバス」並びに年間指導計画を作成する。これらを活用して、評価の仕方を説明するなど授業に先立った指導を行うことにより、学習意欲の向上を図る。また、令和３年度から完全実施される新学習指導要領に向けて、学習評価の在り方について検討を行う。今年度から実施の学習指導要領に応じた学習評価について生徒、保護者に十分に説明を行い、確実に実施し、説明責任を果たす。

⑩全国学力調査・全国学習状況調査や伊丹市学習到達度調査及び本校独自の学習到達度調査の分析結果を授業改善や日常の教科指導に活かす。

⑪「学習優先の日」及び「土曜学習」、放課後等の補習を有効的に行う。

⑫市教育委員会の指導主事の参加のもと、月に１回定例の教科部会を開催し、ベテラン、中堅教員から若手教員へ授業に関するノウハウを伝授する。

⑬指導案の作成から教科内で検討を重ねて一人一授業公開を行い、指導助言を行うなど、互いに切磋琢磨する校内研究を進める。

⑭市教育委員会の指導主事などに授業を見てもらい、指導助言を受けるなど、若手教員の授業力の向上を図る。

⑮教員同士が互いに授業を見合う習慣づけを行う。

⑯「学習の手引き」を活用したり、月１回随時「学力向上委員会」を開催したりして、家庭学習のあり方や学力向上に向けた取り組みについて検討する。

⑰１人に１台タブレットが導入に向けて、されたことにより積極的なＩＣＴ器機の活用を図る。

（２）表現力の育成のため全領域でことばの力育成について推進するとともに、理数教育の充実を図る。

①全ての教科指導においてグループ活動を取り入れ、生徒自らが考えを出し、思考を高め合い発言する学習能力を培う。

②各学級において「１分間スピーチ」を行い、自らの考えや思いを表現する力を培う。また、学年では各クラス代表者による「スピーチ大会」を開催する。

③「図書館まつり」を開催したり、昼休みに「出前図書館」を実施するなどして、学校図書館の効果的な活用を促し、読書量の増加に努める。また、読書量の多いクラスを学期に１回、多い生徒を年に１回表彰したり、朝読書の時間にボランティアによる読み聞かせを行うなどして、読書に対する意欲や興味を高める。

④理科、数学科において個に応じたきめ細やかなティームティーチングや少人数指導を行い、理数教育の充実に努める。

（３）学級経営の充実を図る。

①自他共に大切する学級づくり、学年づくりを推進する。

②より良い学級を築こうとする自発的な態度を育てる学級活動を充実する。

③Q-U調査を実施することにより、学級における人間関係や学級満足度を把握し、よりよいクラスを目指した学級経営を行う。

（４）共感的な態度で、生徒の言葉に真摯に耳を傾け、温かさの中に厳しさのある生徒指導を実践する。

①温かいふれあいをもって生徒の自尊感情を育む。

②個人ノートや教育相談の時間などを活用して生徒理解を図るとともに、「関わること」「気にかけること」「モデルを示すこと」「勇気づけること」など、生徒に愛情を持って接するよう努める。

③問題行動、不登校、いじめ等の解消に向け、教職員の共通理解のもと早期発見、早期対応を実行する。

④不登校については、「不登校児童生徒を出さないための伊丹市共通実践事項」を実践する。また、小学校から引き継いだ「児童生徒の個人状況・学校対応シート」を活用するなどして、中学１年生における不登校に対して早期に対応を図る。

【共通実践事項】～早期に発見し早期に対応する～

毎朝、出欠状況を確認後、次の事項に配意する。

・１日目の欠席は家庭から連絡が「ある」時、確実に担任に報告する。家庭から連絡が「ない」時、担任は１校時の授業前に電話で連絡をとる。

・２日目の欠席は家庭からの連絡の有無に関わらず担任が電話で連絡をとる。

・３日目の欠席は家庭からの連絡の有無に関わらず担任が家庭訪問する。

・４日以降連続して欠席の場合は教育相談、学年、生徒指導担当などの支援を得て、一層保護者との連携を進める。

⑤できる限り専門家（スクールカウンセラーや、スクールソーシャルワーカー）が参加して、月１回「不登校対策委員会」を開催し、担任が作成した「長欠生徒登校プラン」を元に学校や教室復帰への支援のあり方を検討する。

⑥不登校傾向生徒については別室を設け、保護者や地域などの外部人材を活用して学習指導や様々な体験活動を行い達成感や自己肯定感を育むことにより、教室への復帰を図る。

⑦いじめに対しては「伊丹市立西中学校いじめ防止等のための基本方針」に則り、早期発見に努め、「チーム学校」としての組織的な対応を行う。

⑧警察、こども家庭センター、こども家庭課等の関係機関との連携を密に行う。

⑨新たに委員会を立ち上げ、校則改定委員会やＰＴＡ企画委員会、学級、委員会、全校集会等で話し合ったりアンケートをとったりするなどして、生徒、保護者、教職員の意見を反映させながら、校則を見直す。

（５）お互いの人権を尊重し合い、健康でたくましく心身ともに健やかな生徒の育成を図る。

①道徳の時間において、本市「心の匠、町の先生」事業を活用して講師を招聘する講演会を行い、豊かな心の育成を図る。

②「道徳の教科化」にともない、阪神地区中学校道徳教育研究大会伊丹大会の発表を見すえて、「考え、議論する」授業や励ます評価を実践する。

③「性的マイノリティ」をめぐる人権課題については、教職員の理解を深めるために教職員研修等を実施する。

④特別支援教育コーディネーターが推進の中心となり、「個別の指導計画」及び「教育支援計画」を作成し一人ひとりのニーズに応じた教育的支援に取り組む。

⑤校内特別支援教育推進委員会を中心として、ユニバーサルデザインの視点に立った学習環境づくりや授業について積極的に取り組んでいく。

⑥基本的生活習慣を確立し、健康な体、体力の向上、望ましい食習慣を養う。

⑦「学校給食は食育において生きた教材である」との認識のもと、「食事の重要性」「心身の健康」「食品を選択する能力」「感謝の心」「社会性」「食文化」等の食に関する指導を行い、学校給食を通じた食育の推進に取り組む。

⑧全学年において「コグトレ」※に取り組み、生徒一人ひとりの発達面の苦手さを軽減させる。

※“コグトレ”とは、Cognitive ○○ training＝認知○○トレーニングの略称で、子どもたちが学校や社会で困らないために、社会面（認知ソーシャルトレーニング）、学習面（認知機能強化トレーニング）、身体面（認知作業トレーニング）（○○には下線の言葉が入る）という３方面から子どもを支援する包括的プログラム。宮口幸治（立命館大学教授・児童神経科医・医学博士）が考案。

（６）「きょうだい学級」や特別活動の活性化を図る。

①上級生が下級生の模範となる「きょうだい学級」を活性化させ、体育大会、文化祭や合唱コンクール、儀式的行事などを自尊感情やあこがれを実感する機会とする。

②生徒が自主的、主体的に生徒会活動、部活動等を行い、達成感を感じる機会とする。

（７）家庭、地域との連携を密にする。

①スマートフォン・携帯電話の所持やルール決め、家庭学習の時間の確保等について、保護者に積極的に協力を呼びかける。

②トライやる・ウィーク、ボランティア活動などの体験的な活動の実施や職員や生徒の地域行事への積極的な参加など、地域との交流を密にする。

③オープンスクールを年２回（６月、１月）実施し、地域や保護者に「開かれた学校」づくりを目指す。

④学校・学年だよりの発行やホームページの更新などにより積極的に情報発信し、家庭や地域との連携を密にする。

⑤学校運営協議会を有効的に機能させ、地域と学校が連携して学校運営に取り組む。

（８）幼小中連携を積極的に推進する。

小中学校の教員間が互いに行事や授業を見合ったり、生徒指導や研究に関する夏季研修会を合同で行ったりして、９年間をスパンとした顔の見える連携を積極的に行う。

（９）個に応じた適切な進路指導を行う。

生徒一人ひとりの進路実現に向けて、生徒の学力向上、個々の適性、能力、興味・関心に応じた適正な進路指導に努める。

(10) 自ら安全で安心な生活を求め実践できる知識、技能、態度を育成する。

①東日本大震災、阪神淡路大震災を教訓とし、減災の知識も取り入れながら、「自らの命は自らで守る」ための防災訓練を実施する。

②関係機関と連携して「自転車交通安全教室」を開催し、交通事故の未然防止に努める。

(11) 生徒とふれあう時間を確保するため業務改善を行う。

①記録簿や留守番電話のの活用、定時退勤デー・ノー部活動デー・ノー会議デーの実施により、教職員の勤務時間の適正化を図る。

②教職員ルールブックや保護者向けガイドブックを積極的に活用する。

③ＩＣＴ機器の一元管理を行い、いつでもどこでも使用できるようにする。

(12) 若手教職員の育成を図る。

主幹教諭やミドルリーダー、外部からの人材を講師として、若手教職員を対象としたＯＪＴ研修を実施する。グループワークなどの参加型の研修を増やし、若手教職員の悩みや課題を共有するとともに、「メンターチーム」内で話し合うことによりその解決を図り、指導力の向上を図るピアサポート的な研修を実施する。